

タイトル	幕末期に松浦武四郎が入手・発信した情報について
著者	松本， あづさ； MATSUMOTO, Azusa
引用	北海学園大学人文論集(65)： 41-50
発行日	2018-08-31

幕末期に松浦武四郎が入手・発信した 情報について

松 本 あづさ

○松本氏 皆様、こんにちは。ただいま御紹介にあずかりました藤女子大学の松本と申します。北海学園大学では、古文書講読という授業を担当させてもらっているのですが、私の古文書の先生は、最初に御講演をされた三浦先生なので、本当に緊張しています。きょうはよろしく願いいたします。

きょう、私が報告させていただくのは、〈武四郎と情報〉についてなのですが、このテーマに取り組みはじめたきっかけがあります。以前、北海道開拓記念館の学芸員でいらっしゃった笹木義友さんが研究代表者を務めていた科研費の調査に参加させていただいたことです。

その際、神奈川県立歴史博物館で調査の機会をいただいたのが『浩然随筆』という史料です。「浩然」というのは、仙台藩領の人物で伊藤姓であったことはわかったのですが、未解明の部分も多い人物です。

この『浩然随筆』が10帙50冊あります。その13冊に松浦武四郎関係の書簡がありました。その内容について報告させていただく機会を2011年にいただきました。この13冊に含まれていたのは、嘉永6年から嘉永7年の2年間の武四郎の書簡でした。武四郎が仙台にいる人物に書簡をたくさん送っていたのです。

そのメーンの内容は、仙台にいる人たちが入手困難な対外関係記事を中心とするものでした。一番多かったのは、嘉永6年にやってきたペリーやプチャーチンに関する情報です。そのペリーやプチャーチンとの外交交渉の経過について、幕府の資料を写したものを一緒に送っていました。幕府の評議があった次の日であるとか、翌々日であるとか、速報性が非常に高

いです。武四郎情報の特徴としては、手紙に自分でまとめるだけでなく、証拠品として幕府の評議内容を資料としてつけるという点にありました。

きょう、蝦夷地のことに御関心がある方もたくさんいらっしゃると思います。私も蝦夷地のことはどのぐらい出るのかなと思っていたのですが、蝦夷地の記事はとても少ないです。メーンは、江戸での幕府の評議、最後にちょっと武四郎の近況が出てくるという感じです。武四郎の近況として、表1のNo.6にあるように、転宅、引っ越しなんかが書かれています。また、ペリー来航後に武四郎は攘夷の勅命を得るために、主に京都で周旋活動を行っていて、このことに関して仙台のほかに宇和島などにも情報を発信しています。

2011年の段階では、武四郎はどういう情報を集めていたのかということで終わったのですが、一つ大きな疑問が残りました。三浦さんのお話にもあったように、武四郎は「蝦夷通」ですので、この後どんどん蝦夷地関連の書籍を出版していきます。

私は、ペリー来航にも詳しい武四郎というのは知らなかったので非常にびっくりしたのです。びっくりしたのと同時に、これだけたくさん情報を持っている中で、蝦夷地のほうに傾倒していく、これはどういうきっかけとか、思想があったのかなということが気になりました。きょうは、その結論は出ていないのですが、もう少し丹念に武四郎の対外意識、対外認識というものをひもといてみたいと思いました。様々な情報が書かれた武四郎の書簡をもとに、対外意識の変化について見ていきたいと思います。

それでは、1ページをご覧ください。

そもそも、ペリー来航前から武四郎は蝦夷地に向かっていて、『蝦夷日誌』も完成させています。ペリー来航前から蝦夷地には関心があること、そして先ほど三浦さんの講演にもあったように、ロシアの南下に対する危機感が大きいこと、これらをふまえて海防の意識というものはどういったものかということを見ていきます。

史料1は、1848年のもので、武四郎は31歳です。3回目の蝦夷地調査の前なのですが、そのときに書かれた「海防策」という史料です。タイトルが「乍恐松前地并津軽地え異国船渡来の義に付奉申上候」となっています。蝦夷地だけではないのです。松前地ならびに津軽地となっています。この文章では、まず、異国船が蝦夷地にやってくる理由を考察しています。対外事情について考察していった、「四大洲中財産有之國に來り、交易愈々手広く通商仕候て、其利潤多有之申候國へは、事繁く航海仕候義」とあります。その続きは「尚又彼等は利に先立候氣習に御座候間」となっていて、通商の利益を求めるとことが書かれています。

その後、彼らにはどんな「奸計」があるかわからないということも書かれていて、利益を追求している列強が津軽や松前地にやってくるのを防ぐために「海岸の御防禦第一之義に御座候」と主張しています。

この文章の最後のほうに、「其段御防辺大切之義」とありますが、「防辺」には辺境という意味があります。武四郎の頭の中には、日本の辺境として、津軽・南部、蝦夷地という図式があったようです。

こうした海防意識のもとで、アイヌの人口減少問題にも触れています。そして、海防意識は1851年の史料2にもみえます。「奥羽海岸并蝦夷地之事より要は無事」と、やはり蝦夷地だけでなく、広く認識しています。

このように、列強に対する海防という観点で蝦夷地を見ていたのですが、この海防意識の大きな画期が1854年にあると考えています。この年の3月には日米和親条約が結ばれて、5月には和親条約の附録が調印されています。

この流れを武四郎の言葉で見えていくと、史料3に「ヘルリ者メキシコを取候人」、史料4に「弥伊豆下田・松前箱館御貸ニ相成候」とあります。「取る」「貸す」とちょっと違う表現ですが、列強に対する武四郎の意識がかいまみえます。

史料5をご覧ください。この年に、浩然に送る内容が変わりまして、海防策も上書も「皆無用」になったと書かれています。2011年に報告をした際には、集めた情報は何かということばかりに目が行っていたので、この

部分をすっかり読み飛ばしていました。しかし、仙台人との書簡のやりとりが嘉永7年8月12日で終わっていることにもあらわれているように、条約の締結後に海防策が「無用」になったと認識しています。

嘉永7年、日米和親条約後に攘夷の勅命を得るために奔走していた武四郎の活動が挫折したと言えると思います。それは、主に海防という観点で蝦夷地問題に言及していた武四郎の活動が見直される契機であったとも思われます。

この後、対外認識はどうなったかということを見ていきたいと思います。武四郎は攘夷論者との付き合いが深いです。榎林昌建など外国人が日本にいるのは許せないというような強硬な発言をするような人物との付き合いも多く、武四郎を攘夷論者というキーワードでくくるのは間違いないと思うのですが、手紙を読んでいきますと、武四郎の攘夷の中身は複雑なものがあるのではないかという気がしてきます。史料6は、ペリー来航前の嘉永4年11月に家族に宛てた手紙です。「気は、国禁さへ無ば欧羅巴、米利堅迄も行度つもりに御座候」と、鎖国令さえなければヨーロッパやアメリカまでも行きたいと言っています。

次の〈通商には反対〉というところをご覧ください。史料7は、1854年3月に、ロシア応接掛の松本十郎兵衛に宛てた上書です。線を引いたところを見ますと、「俄羅斯人并亜墨利加人共皇国出産之米穀・金帛等に多く目を懸、且無用之器財等持越追々交易相始、世界無双の金銀・米穀・銅鉄并ニ醬油・味噌・筆紙・木綿等持帰り候事ニ御座候」とあります。続いて、史料8の安政6年の手紙を見ていただくと、「先方(外国—引用者注)より来るは皆玩物、有ても無ても品の品ニ御座候。左候ハゞ、其後金銀の吹かへと行候事ニおしつまり申候」とあります。武四郎は、「海防策」の段階から一貫して列強の利益を追及する姿勢に疑問を持っていて、それに対しては反対をするのですけれども、榎林昌建のような、すぐに外国人を排斥しようとか、そういったことにはなっていません。むしろ、史料6のように、その国には興味がある。

武四郎が攘夷を主張しつつ、すぐに外国人を排斥しようとしないところ

は、蝦夷地周辺の戦争に対する冷静な視線ともつながっているように思います。ペリー来航後すぐにクリミア戦争がおこります。クリミア戦争は1853年から56年におき、1855年には、カムチャッカが主戦場となりました。

「蝦夷通」の武四郎でしたら、手紙にこの情報を書くときに、蝦夷地をどうしたいかということを書きそうなものなのですが、客観的な事実を書くだけなのです。蝦夷地を守らなければいけないということも言いません。蝦夷地に近いところで起きている戦争にもかなり冷静です。それが史料10です。

ただ、客観的な事実を発信する武四郎が一步踏み込んだ言葉を述べるのが、1862年12月の手紙です。こちらは京都の山本榕室に宛てた手紙です。「扱、蝦夷地、最早カラフト地者、ロシヤ、半島を蚕食し、最早南岸ニ及候、本蝦夷地ニも毎々舟ニ而参申候、比ま、置候ハ、三、五年を不持して魯夷の物と成候」とあります。最後の部分には、一条忠香という公家に蝦夷地政策を何とかしてほしいということを周旋する内容が書かれています。客観的な事実から一步踏み込んで依頼をしている文章になります。

1854年の「挫折」後、書簡では客観的な情報発信を主としていたように見える武四郎が、この時期のサハリン国境問題について熱烈な感情を持っていることが伝わってきます。一方で、この年、武四郎には蝦夷地御用の依頼があったものの、断っています。もう自分は出向かないということのあらわれかなというふうにも思いました。自分の足でサハリンに行くことはしないということの裏返しで、人に頼んでいると読めるかと思いました。

最後に、幕末の書簡を通時的にみるなかで気になった〈呼称の変遷〉、特にアイヌをどう記すかということに触れたいと思います。呼称には対外意識があらわれると思うからです。武四郎は、アイヌを指す呼称として「夷人」という言葉を当初は使っています。ただ、「夷人」というのは、異国人に対しても一貫して使われます。

1856年に幕府は、アイヌの呼称を「土人」にすることを通達しています。これは、異国人をアイヌと同じ「夷人」としながら、蝦夷地の幕領化に積

極的であった武四郎にとっては受け入れやすいものだったのではないかと思います。武四郎は幕領化後すぐに記録の中でもほぼ「土人」にしています。「夷人」と「土人」、混用もしていますが、出版物などでは「土人」表記にすっと移行する印象を受けています。

一方で、史料15にあるように、1856年以後、アイヌ以外のカラフトの先住民を「夷人」のままにしています。幕領蝦夷地のアイヌを「土人」として区別しているところに、武四郎の攘夷意識の一端があらわれているように思いました。

まとまらない話をしてしまったのですけれども、武四郎がやりとりした書簡の中から、武四郎の対外意識をさらに掘り下げてみるができるかもしれないということを考えました。御清聴ありがとうございました。
(拍手)

北海学園大学人文学会第5回大会
「松浦武四郎の光と影」

2017年11月4日

幕末期に松浦武四郎が入手・発信した情報について

松本あづさ（藤女子大学）

はじめに

- ・「近世後期から近代初頭にかけて形成された知識人ネットワークに関する基礎的研究」（科研費・基盤研究（B）、研究代表者・笹木義友）における『浩然随筆』との出会い
- ・『浩然随筆』：神奈川県立歴史博物館所蔵。10帙50冊／浩然は仙台藩領の人物
：13冊に武四郎関係文書¹（嘉永6年（1853）4月30日～嘉永7年8月12日）
→ 同史料における嘉永6・7年の武四郎²
：幕府機密情報の入手・発信（ペリーやプチャーチンとの交渉経過、幕府の人事異動）^{表1}
※ 嘉永6年9月、攘夷の勅名を得るため周旋活動に奔走する³
⇒ 多くの対外情報を有するなかで蝦夷地問題に傾倒していくことが検討課題として残った。
そこで、武四郎の対外意識の変遷について、主に書簡類から考えたい。

表1 『浩然随筆』のなかの武四郎書簡⁴（一部）

No.	年月日	差出（原文）	宛先	摘要
1	嘉永6年4月30日	—	（伊藤浩然）	・幕府の人事異動 ・海外情勢（清朝大乱、ロシア黒龍江進出）
2	嘉永6年6月14日頃	松浦弘	山本杉芽 宮下一止	・ペリーが来航した6月3日～13日頃までの動向（幕府への注進状、幕閣の評議、触書、ペリー艦隊の動静、浦賀の海防）
3	嘉永6年8月3日	松浦他気志楼	—	・様々な情報（徳川斉昭の評判、狂歌、江戸の物価、吉原・猿蓑のアメリカ拳、竹堂・盤溪など仙台藩士、天候、浦賀の海防） ・アメリカ書翰の「蘭書翻訳」を送付。その他、副書4通は10日頃入手次第に送付 ・武四郎の近況（「（蝦夷）日誌初篇十一冊」の写りが終わり、明日までに製本し、呈覧へ）
4	嘉永6年6月25日	多気志楼主人	伊藤浩然	・様々な情報（ペリー艦隊の退去、將軍逝去、水戸藩、阿部正弘に関する狂歌） ・各藩からの届書、町触など50枚ほど集め、「全尾」した際に「壺本」送る ・中浜万次郎の漂流記や絵図を送る
5	嘉永6年8月13日	憂北生	伊藤浩然	・長崎へロシア船渡来、新潟へ異国船渡来、「打払」と「交易」をめぐる議論
6	嘉永6年8月28日	憂北生	伊藤浩然	・水戸藩海保半平が浦賀応接についてまとめた「秘書」、「ロシア船一件荒増書」、「六月九日アメリカ江御諭書」を送る ・武四郎の転宅について
7	嘉永6年8月14日	—	（宮下一止）	・松前から江戸登となった囚人5人、中浜万次郎の江戸召喚などについて

¹ 笹木義友・三浦泰之編『松浦武四郎研究序説—幕末維新期における知識人ネットワークの諸相』（北海道出版企画センター、2011年、以下「研究序説」）所収の「松浦武四郎関係書簡一覧」参照。

² 拙稿「『浩然随筆』における松浦武四郎—幕末期における仙台人との関わり—」（同上所収）

³ 笹木義友編『新版 松浦武四郎自伝』（北海道出版企画センター、2013年）

⁴ 北海道開拓記念館フォーラム「松浦武四郎」（2011年3月13日）における発表資料を一部改変。

1. ペリー来航前後の対外認識と北方問題

(1) ペリー来航前の「海防策」

【史料1】嘉永元年(1848)、松浦武四郎「海防策」(住田正一編『日本海防史料叢書』第七巻、海防史料刊行会、1933年)

① 日本の「防辺」の必要性

乍恐松前地并津軽地え異国船渡来の義に付奉申上候

彼西洋之諸州并両亜墨利加洲金銀銅鉄等も有之候得共、元來荒蕪之地多、土人今日の生産に事欠候所より、四大洲中財産有之國に來り、交易愈々手広く通商仕候て、其利潤多有之申候國へは、事驚く航海仕候義と奉存候、其内にも松前蝦夷地、土人不足の処等には繁々渡来仕候間には、事慣候共、私に少々品の品にても追々交易も相始候義は難斗候間、御禁断の義は嚴重に被仰付、尚又彼等は利に先立候氣習に御座候間、當時有名の強邦にて国政専仁慈を施し、贅者聾耳の者の養館迄も有之候哉に承り候得共、彼等何等の奸計有之候共難斗候間、海岸の御防禦第一之義に御座候。(中略)御公儀様の御取扱にて両家(津軽家・南部家—引用者注)和熟仕候様に御取斗にも相成候得ば万端御防辺の一助共相成候哉に奉存候、如此辺境の土民は性來愚実には有之候、何共難致哉に奉存候、其段御防辺大切之義と奉存候。

② アイヌ人口減少の問題

今三十何年の間には定て夷人の種も相絶候事と奉存候、何分御上様の御仁沢にて夷人成行の様御計策も有之候得ば目出度義に奉存候、

【史料2】嘉永4年(1851)8月16日、平松楽斎⁵宛て松浦武四郎書簡(『松浦竹四郎研究会会誌』22

(以下、会誌)、1997年12月、6頁)

(前略)拙者に於ては只今羽羽海岸并蝦夷地之事より要は無事と思召可被下候。

→ 西洋の通商要求に対して津軽・南部以北の「防辺」を進言すると同時に、アイヌの人口減少問題も提言

(2) 一つの画期としての1854年

【史料3】嘉永7年(1854)3月12日付、足代弘訓⁶宛て松浦武四郎書簡(『会誌』28、1999年、7頁)

一、滞留アメリカ船、何れ四月五月比も居候由風唱有申候、此名ヘルリ者メキシコを取候人ニ有之候由、当時世界ニ三傑と申事ニ御座候、

【史料4】(嘉永7年4月)20日付、『浩然随筆』所収の松浦武四郎書簡(『研究序説』、150頁)

一、弥伊豆下田・松前箱館御貸ニ相成候、此頃ペルリは連台〇〔注記〕「寺カ」にて入湯、夷人共は村々乱入強横を頻りと致候由風唱有之候、

【史料5】嘉永7年(1854)6月15日付、浩然齋先生(浩然)宛て松浦武四郎書簡(『研究序説』、159頁)

一、亜墨利加再渡之一件、此度は余り珍敷も無之候間、当地一同集メ候も無之候、又海防策も上書も皆無用ニ属被申候、世の中蒙古退治日蓮上人の曼荼羅が御本丸へ御勧請ニ相成候時勢、是ニ而万事御察し可被成候、

→ 条約締結後に海防策は「無用」になったと漏らす

⁵ 平松健之助。津藩士。儒者。武四郎は天保元年(1830)に平松塾に入った。

⁶ 1784-1856。足代家は代々伊勢外富の禰宜。国学者。

2. ペリー来航後の対外認識と情報活動

（1）武四郎の攘夷思想をめぐって

① 外国人排斥とは異なる感覚

【史料6】嘉永4年11月11日付、兄左七・甥次郎宛て武四郎書簡（『会誌』23、1998年5月、5頁）
鏡を見れば最早右の鬢に白髪が生え申候が、氣は、国禁さへ無ば欧羅巴、米利堅迄も行度つものに御座候。

② 通商には反対

【史料7】嘉永7年（1854）3月8日付、松本十郎兵衛宛て呈書控（『会誌』28、1999年11月、4頁）
是等にて異人は我邦の品を望み、我邦も異国の品々流行仕り候 左様有之候得共内密通商致し候より起り、俄羅斯人并亜墨利加人共皇国出產之米穀・金帛等に多く目を懸、且無用之器財等持越追々交易相始、世界無双の金銀・米穀・銅鉄并蠶繭・味噌・筆紙・木綿等持帰り候事ニ御座候。実ニ、彼等に其味を知らしめしより、糠を嘗て米に及候形勢ニ相成候より、此度之如き蒙慢之筋願出候哉ニ奉存候。

【史料8】安政6年2月29日付、川喜田石水⁷宛て松浦武四郎書簡（『会誌』35、2002年3月、9頁）
金奈川、横浜の交易も、いよいよ当五月頃より始り申候。是も如何ニ御座候哉。先此方より遣し候物は、ぬりもの・茶・とりもち之類ニ御座候得共、先方より来るは皆玩物、有ても無ても品の御座候。左候ハ、其後金銀の吹かへと行候事ニおしつたり申候。（後略）

→ 通商には一貫して反対しているものの、外国人排斥という強硬な攘夷論とは趣が異なるのではないかと。

（2）クリミア戦争に関する情報入手と発信

① クリミア戦争の情報入手し、客観的に発信する

【史料9】安政2年（1855）3月26日付、足代弘訓宛て松浦武四郎書簡（『会誌』62、2011年9月、4頁）
風説イギリス・フランス、カムシャツカの方より俄羅斯をせめ申候。五年まけ候而英將軍自殺仕候、仏將討たれ申候由ニ御座候、尚委細後便ニ可申上候。箱館へもをりをり亜船来り申候。欠乏と申いろいろ品ものを買申候由御座候。

【史料10】安政2年5月12日付、川喜田石水宛て松浦武四郎書簡（『会誌』29、2000年5月、7頁）
カムサッカ、大乱有之候由。三月廿日より廿一日まで英、仏、俄とも大人数の死亡人御座候由、承り申候。実ニさわがしき時節ニ相成申候。

② ロシア「蚕食」に対する危機感と周旋活動

【史料11】（文久2年〈1862〉12月）14日付、山本榕室⁸宛て松浦武四郎書簡写し（三浦泰之「東京大学史料編纂所蔵 京都山本家宛て松浦武四郎書簡の写しについて」『会誌』63、2013年1月、16頁）
先生一條家（一条忠香家）へ御出入被成候か、扨、蝦夷地、最早カラフト地者、ロシア、半島を蚕食し、最早南岸ニ及候、本蝦夷地ニも毎々舟ニ而參申候、此ま、置候ハ、三、五年を不持して魯夷の物と成候、此事よくよく左府卿へ御世話成候ハ、如何、若左府卿其儀御申上ニ成候事ニも相成候ハ、僕のくわし図差上候、先今日私共著述之内、式、三指出呈上仕候、何事も後便申上候、（中略）

一條家へ蝦夷地之儀、くれくれも御申込ニ相成候ハ、宜敷候、此儀実ニ国家之為ニ御座候

→ 客観的な情報提供者であることの多い武四郎が、ロシアによるサハリン「蚕食」を訴え、周旋

※ この年、武四郎は蝦夷地御用の「再勤」を断っている

⁷ 1822-1879。津の商家・木綿問屋川喜田家の当主を務める。

⁸ 1809-1864。山本篤庵。京都の本草学者・山本亡羊の次男として生まれ家督を継ぐ。

3. 武四郎の書簡・著作物における呼称の変遷

(1) 夷人(蝦夷人)

① アイヌ

【史料12】嘉永7年(1854)7月16日付、「三航蝦夷全図 凡例」(『研究序説』、164頁)

一、エ印を夷人住居の村落とし、○印を人間地に而村落有るの地となす、^{アイヌ}夷人も人間も共に村落の事故ニ印を別つにも及へされとも、東部落部村森村イソヤ村根田内村の如く入接之地も有れば二様ニ其印を別つ、然れども夷人は時として漁猟の都合ニ随ひて居を移すことも有る故ニ敢てエ印の方は定まりたと云にもあらず、嘗是我か疎漏とする事なかれ、

【史料13】安政5年(1854)12月11日付、川喜田石水宛て武四郎書簡(『会誌』35、2002年3月、5頁)
今度蝦夷人召連、出府仕候。何れ来夏まで滞留仕り居候。

② 異国人(→史料4・波線部も)

【史料14】安政元年(1854)3月5日付、足代弘訓宛て松浦武四郎書簡(『会誌』28、1999年11月、2頁)
一、愈御安泰奉賀候、然者、未だ墨夷滞船仕候、然るに此地者なれこに相成候、武備も寝入申候、如何にも致し方無之候次第、于今、舶夷人共者追々と土人になれ申候、(後略)

③ 安政3年以降・カラフトのアイヌ以外の先住民

【史料15】安政4年8月28日、村垣淡路守へ奉る書(『会誌』67、2013年6月、11頁)

(前略)其上北蝦夷地に於ても、白ヌンよりビシャサン越新道一ヶ所見立、御用相勤申上候上ニ而今般の御請取渡の儀ニも有之候。追々四海外夷の帆形有之候哉、不容易時節にも有之候間、可成文武筋迄も参り候様被仰付候間、ワロッコ、タライカ辺迄見分仕候。則以書面奉申上候。

尚情愚案仕候ニ、右二部の夷人共、未だ何れの地え統属仕候と申儀も無之候者に御座候。(中略)余の儀は兎も角も、支配人・番人等土人の妻を強奪致し候事ハ計りは、御禁じ被成候方宜敷哉に奉存候。(後略)

(2) 土人

① その土地の住人(日本、異国)

【史料16】「鹿角日誌」巻之二(吉田武三編『松浦武四郎紀行集』上、富山房、1975年、375頁)

扱土人の云に此山を七時雨と云えるは、如何計霽たる日而ニ而も日ニ七度ゾツ時雨降り来るよしを傳ふ。

② 安政3年以降のアイヌ(ただし、安政3・4年は一つの書簡における「夷人」「土人」の混用が多い)

【史料17】安政3年4月16日付、向山源太夫宛て松浦武四郎書簡(会誌64号、2012年5月、9頁)

御公料の節は、此川筋漁事之事は、セタナイ夷人カムレツラと申者ニ賄の為ニ被下ニ相成候由。此川も運上屋ニ而漁事仕候。夷人共は漁事一切不相成由ニ申居候。(中略)当所上陸仕候而より、土人共夜飯の支度中、其近辺試歩仕候ニ、樹木多くは(後略)

→ 多くの対外情報を背景に著述活動を行なった武四郎にとって呼称の問題は小さくなかったとみられる

おわりに

- ・書簡に武四郎の意識が率直に書かれることは少ないが、通時的に見ることで浮かび上がる点がある。
- ・往復書簡と刊行物、双方をあわせて見えてくる武四郎の蝦夷地認識の変遷が今後の課題。